神の名を騙(かた)るな

三股

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神の名を騙(かた)るな

【Ｎコード】
Ｎ０２３７Ｗ

【作者名】
三股

【あらすじ】
争う二つの国家が奉ずる、其々の神。人々は互いの神の正統性を主張し“唯一神”である事を掲げ、憎みあった。
傷を負い、手当てを受けたノイが目覚めたのは見知らぬ家であった。
意味深な“言葉”を放つ老婆と、謎の住人達に翻弄する一兵士の物語。

【重複投稿作品】　です

（前書き）

済みません。続きます。
ただ、テーマは変わるので短編として区切ってます。

その国家同士は互いに“神の名”を国名に頂いていた。
それぞれの国家が奉ずる唯一神―アルナーダムとレイ＝スネラ。

互いの神の正統性を主張し“唯一神”である事を掛けて、永きに渡り、戦争が続いている。

これは、
その狭間で揺れ動く
人間達の物語り―

「…っ！？」

彼が気付いたのは、粗末な民家の一室だ。腕や足には包帯が巻かれ、負傷しているのを物語っている。

「…ここ、は？」

見覚えがないのも、無理はない。運び込まれた時点で、既に彼の意識は無かったのだから。

「目が覚めたかい。」

不意に声を掛けられ、入ってきた老婆に彼は顔を向けた。老婆はトレーに乗せた温かいスープと少量の水の入ったコップを、彼の寝ているベッドの傍に置き、自らも脇に置いてある椅子に腰かける。

「さてと。じゃあまず、お前さんの名前を聞こうか。」

有無を言わせぬ口調、それに動けない身体。彼は、己が捕虜として、敵に捕まったのだと思った。

「どうした？何故黙っている。」

怪訝に顔を歪める老婆の姿に、ゴクリと彼は息を飲む。

緊張に表情を強張らせる彼の様子に、老婆は苦笑いして、軽く頭を撫でてやった。

「そう、心配をするでないよ、別に取って喰いやしないさ。」

ついでにもう一つ。

レイ＝スネラ国の者じゃない事も。

「お前さん、アルナーダムの兵士だろ。」

身に付けた服装やら装備で、老婆は推測した。それが、間違いでない事は、彼の表情で見て取れる。

相変わらず黙ったままの彼が、老婆を訝りじっと見つめた。

多少は不快に思ってか、老婆は、ここに彼が連れ込まれた経緯を話す。

「お前さんはね、向こうの山の窪地に倒れていたんだよ。」

穏やかな表情で静かに…語りかける様に話す老婆。その姿にほんの少し彼は緊張を解いた目を、向けた。
「最も最初にお前さんを見つけて、此処に連れて来る事を望んだのは…」
ほれ、と言わんばかりに小さな明り窓の外へと眼を遣った。連られて彼も外を見る。

そこには、忙しそうに山羊の世話やら洗濯物を干している幼い少女の姿があった。
「…あの子が？」
思わず漏れ出た言葉に彼ははっとした。老婆は気にする風でもなく、話を続ける。
「ここは、レイ＝スネラ国でもアルナーダム国でも無い、神様の大地だ。」

悪びれも無く、老婆は言った。神を語る行為は一部の神官以外、畏れ多くて禁じられているというのに。
「ほれ。」
食いな。と言わんばかりに、運んできたスープを差し出した。まだ信用出来ずにそれを持て余す彼に、やれやれと溜息をついて、老婆は重い腰を上げて立つ。
「怪我は大した事無いから、それを食ったらちょいと、仕事を手伝ってもらえんかね。」

それだけ言うと、振り返りもせずに元来た扉を潜って、階下へと降りていった。

姿が見えなくなって、初めて彼は大きく息を吐いた。本当の所は

分からない。けれど悪意が有る様には、感じられなかった。
彼はそれまでの警戒心を解くと、少し冷めたスープを手にして、ゆっくりと胃袋へ流し込んだ。

痛む足を庇いつつ、降りてきた先には、小さなテーブルを囲むように、棚が幾つも配置されていた。その一角には料理をする為の場所が設けられている。
彼の所持していた装備も、部屋の隅に丁寧に保管されていた。

椅子の上で、先程見た少女が、蹲って眠っている。
「……、」
声を掛けようと思ったが、あまりに安らかな寝顔だったので忍びなく、そのまま覗き込んでいると、少女が気配に気付いて眼を開けた。

「う、あ、」
「…、済まない、起こすつもりは…」
少女はくるくると目を回して辺りを見渡すと、慌てて椅子から飛び降り、外へ続く扉に走り寄った。
「待ってくれ、危害を加えるつもりは…」
「“つもりはない”かい？お前さん。」
ギィ、と扉が開いて、老婆が顔を見せた。その言い様に少しムッとしながら、彼は漸く、老婆の出した初めの問いに答えた。
「…俺の名は“ノイ”です。」
フフ、と老婆の口から笑みが零れる。
「ついといで。」
そう言って、家を後にした。

“ノイ”と老婆―彼女は自分の名を誤魔化したが―二人は家とは別の、小屋の裏手へ回った。
そこには汗水を垂らして薪を割る、一人の男が立っている。
「…っ！！」
その姿を見た途端、ノイは臨戦態勢で、身構えた。男の腕の紋様は、レイ＝スネラ軍の一等将校を表していたからだ。
「貴様！！」
「おやめ、ノイ。アンタを此処まで運んだ恩人にそりゃないだろ？」
老婆の制止に、ノイは戸惑いを見せる。男は手を休めて、二人を見ていた。
「悪いね、レイヴ。あんた一人に任せっきりで。」
「いえ。」
“レイヴ”と呼ばれた男は顔色一つ変えずに、再び薪割りに精を出す。複雑な表情のノイに、老婆は尻を叩き、手伝うよう促す。
「薪を纏める位、今のアンタにでも出来るだろう？」
手渡された針金と手袋を持って、レイヴの元へ押し出されたノイは、文句を言う間も無く、老婆に置き去られた。
後に残った男二人、特に不利な立場のノイは、黙って薪の束作りに精を出す他なかった。

日も暮れて、全ての薪の束を片付け終えた頃、腹を擽る良い香りが彼らの元にも届いた。

先程の小さな家の中に戻ると、少女が懸命に調理場でシチューを作っている。もう、ほぼ出来上がりの様だ。

「ご苦労だったね、あんた達。ノイ、怪我の具合を見せてみな。」

そう言い、椅子に座らせたノイの腕や足の包帯を取って、新しい物に変えていく。

「よく薬が効いているようだね。これなら治りも早いだろう。」

「あ、あ、」

少女が満面の笑みを浮かべて、重そうにシチューの入った鍋を運ぼうとする。

レイヴは黙って代わりに鍋を運び、慣れた手つきで、其々に並べられた皿に注いだ。

「さぁさ、冷めない内に戴こうかね。」

老婆の掛け声で、全員が小さな食卓を囲んで、席に着いた。

シチューはミルク仕立てで、具が殆ど入ってなかったが、味は信じられない程絶品で、彼らは文句を言う事も無く、次々に口へと運ぶ。

そして全て食べ尽くした頃、老婆が静かに口を開いた。

「どうだい、今日一日を過ごした感想は。」

いきなり言われてノイは戸惑う。レイヴは黙々と後片付けをしているだけだ。

「アンタは何故戦うんだい？」

続け様に振られる、唐突な問い。そう言われても頭に浮かぶ答えは一つしかない。

「勿論、国の為、我等が神の為に…」

「神様はアンタが戦う事を望んでいるのかい？」

ムッとして、ノイは老婆を見た。その瞳は真っ直ぐに揺らぐ事無くノイに問う。

「神様はね。誰にも殺し合う事なんぞ望んじゃいないんだよ。」

その言葉は鋭くノイの心に突き刺さった。自分はあくまで戦うのであって、殺戮している訳では…。

「ノイ、アンタは一体どれ程の敵を倒してきたんだ？　そして倒した敵はどうなった？」

意識もしなかった事項だ。ただ目の前の敵を倒す。それだけしかノイは考えずに戦っていたのだから。しかし。

思い出す。これまで見てきた、戦場の風景。

銃を向けたその先を。

剣を向けたその先を。

「……。」

何も言えずにいるノイに、もう一度糺すように老婆は言った。

「神様は何も望まない。ただ見ているだけだ。」

そしてもう一言呟いた。

「神の名で、“殺せ”と命じたのは誰だい？　よく考えてごらん。」

自ずと指導者の、神の代弁者である最司祭の姿が目に浮かんだ。

彼の言葉は絶対だ。神の声を聴き、神の言葉を代弁しているのだから、間違う筈が無い。

「ノイ、お前が直接神の声を聞き、行なっているのだとしたら、あたしゃ何も言うつもりは無い。…本当に神の“声”を聴いたならね。」

たじろぐノイを見ながら、穏やかに老婆は少女の頭を撫でた。

「あんた達が戦いを止めない間にね、この子の母親は殺されたんだよ。」

そして静かに、残酷な物語を始める。

少女の母親はごく普通の村娘で、生まれ育った小さな村で暮らしていた。

それが、ほんの些細なきっかけで、その村は無残にも戦場へと変わり果てた。勿論、彼女は家族と共に村を出て、辛うじて難を逃れる事が出来たが。

そんな折だ。兵士が逃げた先の隠れ家にやってきたのは。

正直、どちらの国も者だったかなんて分からない。ただ、恐らく皆殺しにするよう、命令が出ていたのだろう。何の力も無い、農夫だった彼女の両親を殺し、男を知らない彼女を、無理矢理犯した。

そして、殺される筈であった。

たまたま彼女が綺麗であったから。

気まぐれで、生かされた彼女。

彼女も、兵士らも、共に心を病んでしまっていたのさ。

彼女は人間である事を捨て、彼らの玩具―ただの物になった。彼らは彼らで、人間の自我とも尊厳ともいえる精神を捨て、ただの獣に成り下がった。

彼女も生きる為というより、ただの飢えを満たす為に泥水を啜り、死肉を食んだという。

そんな中でこの子は生まれた。

彼女は最初この子を拒絶した。けれど、こんな地獄のような世界で、それでも笑顔を向けてくる無垢な存在に、彼女も生きる希望を見出したんだろう。

赤子と共に、逃げ出した。

追われ襲われ逃げる日々。

彼女を追うのは兵士達だけではない。戦いに脅えながら、己の身を守るのに精一杯な村人もそうだ。

それでも懸命に彼女は生きた。

誰の血が混じっているとも知れない、赤子を抱いて。

そんな彼女にも、幸福な日々はやってきたんだよ。神様はちゃんと見ていて下さるからねえ。

生まれ故郷と似た村に、ほんの僅かだが彼女に真っ当な仕事をくれる人達が居たんだ。

喋る事も儘成らない、表情も無い、得体の知れない彼女を、それでも子供を抱えて生きる懸命さに心を打たれた人間が、彼女に生活する為の場所を与えてくれたんだ。

彼女はそこで5年過ごした。再び戦火が彼女を巻き込むまで。

「この子は母親の傍で泣きもせず、ただ蹲っていたんだよ。」

きょとんとした目で見ている少女に笑みを投げ掛ける。老婆は再び言葉を続けた。

「ノイ、アンタは『国の為、神の為』と言った。ならばあんたの言う“国”とはどんな国だい？　アンタの言う“神”はこんな事を望んだのかい？」

流石に何も言い出す事は出来なかった。

「アンタは“ソラート”を最後まで読んだのだろう？」

“原教聖書（ソラート）”アルナーダムの経典の中でも神の御心について書かれた聖典だ。その教えは全ての教典の元となっている。

何故知っているんだ、この老婆は。

「因みに“ラーダム”は読んでみたかい。」
不可解な質問に、この時はノイも怒りを露わにした。
「何故奴らの教本など…っ！？」
カタン、とレイヴの手が止まる。しまった、と思ったがもう遅い。
ノイの緊迫した空気を解さず、少し目を落として老婆は言った。

「読みもしないで語るは愚かな事だね。読む価値も無いと、誰かに吹き込まれたかい。」
再び何事もなく、皿洗いを続けるレイヴ。
その姿にノイは気の置き所がなく、老婆を見遣った。
「価値が有るか、無いかを決めるのは、他の誰かじゃない。あんた自身だよ、ノイ。」
その言葉は誰よりも説得力あった。老婆は徐に立ち上がって幾つもの棚の中から一冊の書を取り出した。

古びた表紙に記されていたのはレイ＝スネラを示す紋様。
「気が向いたら、読んでみるがいいさ。そして、何がどう違うのか、よく考えてごらん。」

片付けを終えたレイヴが、皆に温めた白湯を差し出した。浮かべられたミントの葉が、緊張を解す様に優しく香る。

「じゃあ、あたしはもう寝るよ。レイヴ、後は頼んだよ。」
そう言って、少女を連れて奥の階段を上がって行った。

バツが悪そうに、ノイは一人食卓に取り残された。レイヴが声を

掛けなければ、下手をすると朝までそうしていたかもしれない。

「おい。」

クイ、とレイヴが手招きする。ノイは思案したものの、仕方が無いので彼の後についていった。

着いた先は先程の小屋の中だ。いつの間にか、藁が幾重にも敷かれており、更にその上に、白い大きな布が被せられている。

どうやら簡易のベッドを、彼が拵えてくれていたようだ。ノイはレイヴを見遣った。

彼は気にせずに、端に腰掛けるとそのまま後ろへと転がる。開けられた半分のスペースを見て、ノイもそろりと腰を下ろした。

横になると一層、その柔らかさが、気持ちよく感じられた。地面や固い床の上で眠る事を考えたら、まさしく最高の寝心地だ。

レイヴは黙ったまま、背を向け、もう寝息を立て始めている。

俺は、どうすればいいんだ……

困惑と不安と、それに埋もれる使命感。ノイは頭の中で葛藤しながら、いつしか眠りについた。

（後書き）

良ければ、続編「神の目は見ている」も御覧下さいまし。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0237w/

神の名を騙(かた)るな

2011年10月9日16時14分発行